
まじっく快斗「伽藍童話劇場 白雪姫編」

伽藍堂その弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじつく快斗「伽藍童話劇場 白雪姫編」

【Nコード】

N44680

【作者名】

伽藍堂その式

【あらすじ】

名探偵コナン「シンデレラ編」の続きっぽく、まじつく快斗と名探偵コナンのキャラで白雪姫をやってみました。出来てみると青子と小泉は完全にキャラ崩壊してます。彼女たちであるという性格的一致が一切ありません。そして快斗×青子でも快斗×小泉でもなく、なぜかコ哀です。気持ちのいいハッピーエンドとは言い難い作品ですので、キャラクターを大事にしたい方は読まないでください。

（前書き）

まじっく快斗で「白雪姫」をやってみました。まじっく快斗ですか、カップリングはコ哀しかありません。快斗×青子や快斗×小泉を期待している方はぜひ読まないでください。キャラ崩壊がすさまじいので、キャラクターを大事にしたい人はぜひリターンしてください。

それは昔々のその昔、冬の最中のことでありました。

とある国の女王様が、お城の部屋の黒檀の枠のはまった窓のそばで縫物をしていました。

女王様は縫物をしながら、外でチラチラと降っている雪を眺めていると、手元を狂わせてチクリと指を針でさしてしまいました。

つうつと指から流れる血をぼんやりと眺めていた女王様は、視線をゆっくりと窓の外の雪に向けました。

そしてこんなことを思ったのです。

——わたしは、雪のように体が白く、血のように赤い美しい頬を持ち、この黒檀の枠のように黒い髪をした子が欲しい。

それかしばらくした後、女王様は一人の女の子を生みました。

その女の子は色が雪のように白く、頬は血のように赤く、髪の毛は黒檀のように黒く艶がありました。

その容姿にいたく感激した女王様は、その女の子をアオコ、またの名を白雪姫と名付けました。

しかし、女王様は白雪姫が生まれて二年もせずに、亡くなってしまいました。

——十五年後。

「——お父さん。いくらなんでもそれは犯罪よ」

「し、仕方ないだろう！これが設定なんだから！」

すっかり成長した白雪姫のアオコは、少しも出っ張りを感じられない胸の前で荒々しく腕を組むと、半眼で王たる父、ナカモリ王を睨みました。

口髭を蓄えていながら、威厳がやや足りない感じのナカモリ王は、娘の侮蔑のこもった視線に、バツが悪そうボソボソと言い訳をしました。

「台本にも書いてあっただろう？今更そんなことで憤慨するなよ」

「私は聞いてないもん、未成年と再婚なんてふざけた設定」

アオコが吐き捨てるように言っていると、背後から威圧的な女の人の声がかかりました。

「あーら、見苦しいわよ、白雪姫。父親との喧嘩は城の中では慎んでもらえないかしら？」

アオコが青筋を立てて振り返ると、そこには豪奢に着飾られたドレスを纏った同年の少女――父の再婚相手であるアカコが立っていました。

その再婚相手は確かに美しいのですが、たいへん自惚れが強い、わがままな少女で、自分よりも他の人が少しでも美しいと黒魔法などといった突飛なことを平気でやりだす電波な人でした。

だが、父親の設定に納得できないアオコは、そんなアカコにも牙をむいてしまいます。

「アカコちゃんもアカコちゃんよ！何でこの役引き受けちゃったのよ？！」

「……え？」

せっかく威圧的に登場したのに、役から離れているアオコに怒鳴られて、アカコは困惑してしまい、次の台詞が完全に飛んでしまいました。

「え……あの……」

「とにかく私は反対だからね！」

完全に地がでてしまいオロオロするアカコを尻目に、アオコはナカ

モリ王にそう言い放つと自室へと引き上げて行きました。

後には、

「何か……すみません」

「いや、いいんだよ」

訳が分からずに謝るアカコと、苦笑するナカモリ王の姿があるばかりでした。

——翌日。

派手ではないが質の良い自室で目覚めたアオコは、昨日の剣幕が嘘のようなすがすがしい笑顔で天蓋付きのベッドから降りると、朝日を通して大きな窓を全開にしました。

「ん〜！」

窓を開けた体制から気持ちよさそうに伸びをしながら、清々しい朝日を名いっばい浴びていると、控えめなノックが自室に響きました。

「どなた？」

アオコが短く聞くとドア向こうから、

「おはようございます、姫様。狩人のサグルです。入ってもよろしいですか？」

「今寝着のままでは失礼ですので、中庭の方で待ってもらえませんか？着替えてすぐに行きますので」

なぜ一介の狩人が王宮の姫の部屋にこんなに簡単に訪ねられるのかという疑問がアオコの頭の隅で一瞬ちらついたが、考えてはいけないことだとすぐに思い直しました。

メルヘンの世界には往々にしてこういうことがまかり通るものなのです。

「わかりました」

サグルが了承し、去っていくのを足音で確認しながら、アオコは着替えるため大きなクローゼットを開け放ちました――。

「今日もその名に恥じず、白雪のようにお綺麗ですね」

手早く着替えと化粧を終えて中庭に行くと、もつさりとした狩人の服がまるで似合わない長身の美男子――サグルが中央の噴水から笑顔で気障な台詞を口にしました。

それなりの正装でその台詞を言うのなら様にもなりましょうが、獣の皮を被ったようなもつさりした狩人の服では失笑しかわきません。

失笑がばれないように必死に顔と腹筋に力を入れながら、

「ありが、とう、ごさい、ます」

とアオコは答えました。

胸中で失笑されているとは露ほども思っていない哀れな二枚目、狩人のサグルは、アオコの固い笑顔に微笑み返すと「軽く散歩でもしましょう」と言って歩き出しました。

一方その頃、初登場をアオコによって台無しにされたナカモリ王の再婚相手であるアカコは、朝から黒衣を纏って自室にある大きくて豪華な鏡の前に立っていました。

その鏡はアカコの私物なだけあって、やはり普通の鏡などではなく――彼女がこの鏡を見る時は、いつもこう聞いていました。

「鏡よ鏡……国中で誰が一番美しいか言っておくれ」

すると鏡は、

「女王様。あなたこそがここでは一番美しい。しかしながら、白雪姫はその何千倍も美しい」

嫌味な話です。さらなる自尊心を得るために用意したはずの鏡に、その自尊心を傷つけられるというのは。

白雪姫が成長してからというものの、鏡の回答は常にそう答えるようになっていくことに、いい加減アカコも辟易していました。

「アカコさん、ねたみの表情が曖昧すぎますよ」

昨日アオコに駄目出しを受け、今日は役とは言え、鏡に自分よりアオコの方が何千倍も美しいと言われ、アカコのやる気は削がれていく一方でした。

「鏡さん、あなたまで私に駄目出しですか」

すっかり意気消沈してしまっているアカコに、鏡は自分の言葉が失言だったことに気づき、

「すみません。悪気があつたわけではいのです」と素直に謝りました。

「うつん、いいの。鏡さんは役をこなしているだけなんだし。悪いのは昨日から口くな演技が出来ていない私の方なんだから……。八つ当たりしてごめんなさい」

「いえ……そんなことは……」

素だとかかなり控え目で腰の低い紅き魔女に、鏡はバツが悪そうに（といっても鏡なので表情などないですが）していました。

「ふふふ。気を遣ってくれてありがとう、鏡さん」

表情のない鏡だったが、何となく醸している雰囲気を感じ取ったアカコは、優しく微笑えみしました。

「うつん。しよげてなんかいられないわね。私にはこれからまだまだ

出番はあるわけだし」

悲観しててもしょうがないと悟ったアカコは一つ頷くと、鏡の横に置いてある台本を手に取りました。

目当てのページを開くと、そこにはアオコが狩人であるサグルに森へ行きましようと誘われて襲われるシーンでした。

この狩人はアカコの命令でこのような行動を取るのですが、アカコはアオコの駄目出しにショックを受けていたので完全に言いそびれていました。

——まあ、白馬君のことだし、その辺は臨機応変にこなしてくれるとは思っけど。

アカコが台本を前にそんなことを思っているまさにその時——アオコは隣国の境界にある魔のひそむ森で刀を抜いた臨機応変の男——狩人と対峙していました。

「お許しください、白雪姫。これも次期妃となられるアカコ様の命令故！」

「そ、そんな！どうか、どうか狩人さん！命だけは助けてください！もし助けてくれたなら、私はこの森から決して出ませんから！」
「……。わかりました。ただし、本当にこの森から出ないと約束してください」

「はい！約束します！ありがとうございます」

こうして無事命乞いで死なずに済んだ白雪姫のアオコは、国に帰ることもできなくなったので、ひたすら森をさまよい続けました。

「はぁ……はぁ……」

森はどこまでも深く青々としておりましたが、そんな生命溢れる木

々達に感慨が持てるほど、アオコは心に余裕はあるわけもなく、ひたすら歩き続けます。

「はあ……はあ……はあ……」

とりあえずは隣国に保護でも求めようと思い、アオコはまだまだ歩きます。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

鬱蒼と茂る蔭に、限りなく広がる木、木、木！そんな中を白雪姫であるアオコはひたすら歩き続け――、

「ちよっ、待てええ！どれだけ歩かせれば気が済むのよ！？このキチガイナレーション！」

……。

「……………」

……。

「……………」

……。ついに役を放棄したアオコは、訳の分からないことをまるで獣のようにほざきやがりました。

「――あ！今さらつとこつち貶したでしょ！しかも言葉遣いまで変わってるし！ふざけんのもいい加減にしてよ！さっさと小人だして！水が飲みたいのよ！」

無い胸を惜しげもなく張りながら吠える矮小な人間、白雪姫のアオコに、森に住む動物たちの失笑が聞こえます。

「な！？ナレーションのくせに性質の悪い嫌がらせするわね！何気に口悪いし！そんなんだから彼女の一人も出来ないのよ！」

……。そうして吠えながらしばらく（3時間）歩いていると、質素ではありますが頑丈な造りになっている家を見つけました。

「あ、ありがたいわ！ここに一晚泊めらおう！」

しかしそれは疲労困憊のアオコが見ただだの幻覚で、戸口に手を置いた瞬間家は消えてしまい、後には歪にそびえ立つ木があるばかりでした。……ざまあ。

「――ナレエエエシヨオオオン！！」

アオコの渾身の絶叫が森を揺らします。動物たちは肩を揺らしていましたが。

「こら動物ども！吹き出しを堪えてんじゃないわよ！何がそんなにおかしいのよ！」

「……何だか森が騒がしいわね」

森の奥深くに小さく佇む家の前で、小さな茶髪の少女——ドクは眉をひそめて首を傾げました。

「ん？どうした？」

その少女の後ろから大量の洗濯物をかごに入れて家から出てきた黒ぶち眼鏡の少年——ドーピーは、ドクの怪訝な横顔を見て声をかけました。

「……何か、騒がしくない？」

ドクに言われてドーピーも周囲に気を配ると、確かに何やら森がざわめいていました。

「ホントだな」

「……もしかして、白雪姫がこの辺りまで来ているのかしら？」
いつの間にか手にしている台本をペラペラとめくりながら、ドクは再び首を傾げます。

「んなアホな。設定じゃ俺らが鉱山に仕事に行ってる時にここにやつてきて、飯食って寝てるのを俺らが見つけるっていう手筈だろ？」
洗濯物のかごを持ち直しながらドーピーは言いました。

「ええ、台本にそうあるけど……」

ドクはそう言うと正面を指さした。

「じゃあ、アレは誰？」

「へ？」

ドクが指さした方をドーピーを見ると、そこには、泥だらけの一人の少女が肩で息をしながらギラついた眼でこちらを睨みつけていました。

「な！？」

ドクは特に表情が変えませんでした。ドーピーはその存在を視認して驚愕すると、洗濯物を放り出してドクを庇うように前に立ちました。

「何だ、てめえは！」

睨み返すドーピーに怯まず、泥だらけの少女はジャリリと引きずるように一歩前へ出ると、

「み、水……」

そう言つてパタリと倒れてしまいました。

その様子に、ドクとドーピーは顔を見合わせましたが、一拍置いてすぐに二人とも倒れた泥だらけの少女——白雪姫の元に駆け寄りました。

結局、倒れた原因は疲労困憊によるもので、大事には至らなかったものの、何故主人公の白雪姫のアオコが、そんな壮絶な現れ方をしたのか、ドクもドーピーも全く理解できませんでした。

そうやって意識のないアオコを二人で介抱していると、近くを通る行商人から調味料や鉱山用のつるはしを買いに行っていたグランピーとハッピーが帰ってきました。

「え！？もう来たの？白雪姫」

ドクの小さなベッドで窮屈そうに横になっている少女を見て、カチ

ユーシヤをつけた小さな少女——ハッピーはびっくりしたように目を見開きました。

「おい、コナン。これどうなってんだよ？台本と全然違うじゃねーか」

買ってきたつるはしを近くの壁に立てかけながら、おにぎり頭の大柄な少年——グランピーは不機嫌そうにドーピーに言った。

「俺が知るかつての」

グランピーに言いがかりをつけられてドーピーが憤然と答えていると、その声で白雪姫のアオコは目を覚ましました。

「——ここは……？」

覚醒しきれていないのか、ぼんやりとした表情で呟くアオコに、四人の視線が集まります。

「大丈夫？」

代表して傍で看病していたドクが聞くと、しばらく間があつて小さくアオコは頷きました。

「お姉さん、お名前は？」

ハッピーが無邪気な笑顔を振りまきながら聞くと、アオコはそっと微笑みながら、

「——白雪姫のアオコ」

と答えたのでした。

——数日後。

白雪姫が狩人に殺されたと知って、駄目出しをする人が城からい

なくなったことに安堵していた次期妃のアカコは、城の自室で惰眠を貪っていました。

天蓋つきの大きなベッドで枕を抱き枕のように両手で抱え込んで寝ていたアカコを見て、壁に掛けられている魔法の鏡は大きく嘆息しました。

「アカコさん。アカコさん」

「……ん？」

返事はするものの一向に起きる気配がないアカコに、魔法の鏡の嘆息は色濃くなるばかりです。

「まったくいつまで休日気分でいるのです？早くあなたが私に世界一綺麗かどうか聞いてくれないと話が進まないじゃないですか」

「……えー」

ベッドから聞こえる面倒くさそうな声。

「えー、じゃないでしょう？あなたが『白雪姫は実は生きている』ということを知らないで、いつまでたっても毒りんごのくだりが来ません。それに目立ちたがりの隣国の王子のこともあります。いい加減出番を来させないとプリプリ怒りますよ？」

「……ふふ。ちょっと見てみたいかも。黒羽君がプリプリ怒るところ」

ベッドでまどろみながら言うアカコに、魔法の鏡は思わず掛っている壁から落ちそうになりました。

「はああああ。……とにかく形だけでもやってくれませんか？」

ついにいろいろと諦めてしまった魔法の鏡は、面倒くさそうにぞんざいに言つと、アカコは片腕をヒラヒラとあげて、

「まほゝのがかみゝ」

「はい」

「だれ？」

「女王様。あなたこそがここでは一番美しい。しかしながら、白雪姫はその何千倍も美しい」

アカコのえらくはしょった問いかけに、丁寧に答えた魔法の鏡。

「ん、いきってたしらゆきひめには、どくりんごーってことでおやすみなさーい」

アカコはひらひらさせていた片腕をベッドに力なく落としながらそう言つと、再び寝入ってしまった。

「……。いいのでしょうか。これで」

どこか遠くを見つめるような口調で魔法の鏡は眩き、その眩きは紅き魔女の密やかな寝息とともに消えていきました。

——さらに数日後。

小人——もとい子供たちとの生活にも慣れてきた白雪姫のアオコは、いつまでたつても来ないアカコにやきもきしながら日々の生活を送っていました。

今日も鉾山へ仕事に行く子供たちに手を振って留守番をするアオコ。

アオコに見送られ、仕事場へ足を向ける四人の子供。

「——遅すぎる」

「……ん？どうした？」

鉾山へ向かう道すがら、前方ではしゃくハッピーとグランピーをしり目に唐突に呟いたドクに対して、いつかと同じように後ろからドーピーは聞き返しました。

「ねえ。遅すぎると思わない？」

「？……何が？」

ドクの手にはいつかの時と同じように台本が握られています。

「魔女よ魔女。いい加減来てもいいころだと思わない？」

「……ああ、まあ」

何とも気のない返事に、ドクは眉を寄せました。

その様子に気づいたドーピーは、別段取り繕うこともなく、

「——言いたいことはわかる。でも、ぶっちゃけ他人事だしな」

「それを言ったら身も蓋もないでしょ」

「そりやそうかもしれないけどさ。だってまじっく快斗だぜ？」

「？……だから何よ？」

「作品的にも俺ら関係ねーじゃん」

「ホントに身も蓋もない言い方ね。前回黒羽君にはお世話になってるんだから、少しは協力してあげたらどうなのよ？」

「お世話ツつたつて魔法使い役でちよつと出てただけだろ？」

「出番は少なかったけど、かなり重要な役じゃない？」

「いやいやいや。だってよ、結果的には三姉妹の長女役だったお前と俺がくつついたわけだから、意味なかったじゃん、あいつの役」

「そ、それはあなたが勝手にやったことでしょ？」

くつついたなどと言われ、照れたのか、そっぽを向いて言い返すドクに、ドーピーは意地悪く笑いました。

「ふーん。お前だって台本にない告白かましてたのにな」

「……。うるさい。ていうか私達のことなんて今はどうだっていいじゃない。問題は魔女が遅いってことよ」

「……何だよ、前はあんなにやる気なかったのに、今回はやけにストーリーに口出すじゃん」

つるはしを担ぐ肩を右から左に変えながら、ドーピーは言った。

「前回みたいになってほしくないからよ」

「——あ？」

「私達と黒羽君達って状況が結構似てるでしょ？幼馴染で、男の方には人に言えない秘密があって、その秘密を知っている女が横恋慕

している……そっくりじゃない」

「……。言われてみればそっくりだな」

「黒羽君と中森さんは想い合ってると思うの。だから——」

どこか思いつめたように話すドクに、ドーピーはげんりしながら口を挟んだ。

「あのなー。そういうのは当人達が決めるのであってお前が口出すことじゃないだろ？……あ、お前、まさか俺や蘭のことで感じている罪悪感を軽くしたくてそんなこといつてるんじゃないだろうな？」
問い詰めるといよりは呆れたように半眼で言うドーピーに、ドクは思わず押し黙った。

「灰原」

「……。何よ？」

「俺はな、お前が好きなんだ」

「……………」

「蘭を裏切ったのは俺だ。だからお前は罪悪感を感じる必要はない」

「そんなの……」

「無理に感じるなとは言わない。ただ、それに囚われ過ぎないでほしいんだ」

「……………」

「……な？」

「……………。バカ」

ドクはそっぽを向いたまま、小さく呟くのでした。

一方、小人——もとい、子供たちを送り出した白雪姫のアオコは、たまっている家事をハイスピードで取りかかり始めました。

掃除、洗濯、庭掃き、スリーピー、スニージー、バッシュフルのお墓（鉦山の落盤による事故死）の手入れ、お風呂の準備、夕ご飯の下準備。

もろもろが終わるとようやく一息です。

家のリビングでアールグレイを片手に焼き菓子を頬張っていると家のドアをノックする音がしました。

瞬間、アオコは焼き菓子の程よい甘さで緩んでいた顔を一気に引き締めました。

——いよいよ、か！

日の沈み具合からして子供たちが帰ってくる時間ではないため、必然的に来訪者は決まっていました。

そう、紅き魔女です。

「はい」

このあとの展開を考えると緊張してしまい、かなり固い返事をしてしまうアオコ。

ドアを開けると予想通り——とはいきませんでした。

ドアの前には、普通に黒いローブを着たアカコが、バスケットを持って立っていました。

アオコはその様子に思わず頭を抱えました。

——何故老婆とかに変装していないのでしょうか？何故そんなに眠そうにあくびをかみ殺しているのでしょうか？何故そんなに——、

「はい、毒りんごです」

——ニッコリ笑顔で毒りんごですと堂々とほざくのでしょうか？

「アカコちゃん」

「……はい？」

うつむいていつまでもりんごを受け取ろうとしないアオコを、不思議そうに見つめるアカコでしたが、

「役放棄も大概にしなあああ！」

「ひあつ!？」

鬼の形相で迫るアオコ。

そのあまりの形相に恐れをなしたアカコは、あらんばかりの悲鳴を上げながら、ローブの裾を持ち上げると、脱兎の如く逃げたしまった。

「待ちなさああい!」

アオコはそれをやはり鬼の形相のまま追いかけます。

そして、アカコの逃げた先には、仕事が終わった小人——もとい子供たちが談笑しながら帰ってくるどころでした。

「すみませえん! 助けてくださあい!」

すぐ後ろから迫ってくる脅威に足をもつれさせながら逃げるアカコを見て、談笑していた子供たちも一気に表情が変わりました。

「江戸川君!」

「コナン!」

「コナン君!」

三人がほぼ同時にドーピーの名を叫び——ドーピーは隠し持っていた腕時計型麻醉銃を取り出すと、すごい表情で迫りくるアオコに躊躇なく撃ち込んだ。

「これでよかった——んだよね?」

いまいち確信が持てずにいるドーピーに、ドクは、

「終わりよければすべてよしって言うじゃない。最終的にはちゃん

と白雪姫の筋書き通りになったからよしとしなくちゃ」

と花を添えながら言いました。

結局、麻酔銃で意識を失うことになったアオコは、本来の筋書きに戻るべく、今、森の中央に位置する石の祭壇の上で横たわり、子供達が添えた数々の花の中で、ひっそりと眠っています。

一生懸命、空いたスペースに花を添えるグランピーの傍らで、何故かしょげている紅き魔女を必死に慰めているハッピー。

しばらくすると、遠くの方から馬の蹄の音が聞こえてきました。

「ようやくお出ましか。隣国の王子」

「彼も災難よね。自分が主人公の作品なのに自分に一切出番がないなんて」

「え？……何？じゃあ、俺と灰原のこの会話がフィードバックして終わるのか？この話」

「そうなんじゃないの？」

「……。そりゃあんまりだろ？黒羽一言もしゃべってねーじゃん」

「最初っから作者には黒羽君を出す気なんてなかったんだと私は思うわ」

「……。やっぱり？」

「ええ」

「結局今回もさんざんキャラ崩壊させた挙句、俺たちをちよつといちゃつかせて終わるわけか」

「私達、そろそろ他のキャラクターに恨まれそうよね。自分たちだけ幸せ満喫しやがって、みたいな感じで」

「光彦はすでに恨んでたぞ。今回はノツケから死んでたからなあ」

「バシシフル役だったわよね」

「作者側からすれば、技量的にきつかったんだろ？な。この作者、六人以上の人間を描写出来ないから」

「……。ホント。愚かしいわよね」

「ああ」

「また、作る気かしら？」

「童話劇場？」

「ええ」

「流石にもうやんねーだろ？こんな力オスな話」

「そうかしら？私はまたやらかすんじゃないかと思うんだけど」

「何だよ？やってほしいみたいない方だな」

「だって、結局私と江戸川君は……」

「？」

「……ごめんなさい、何でもないわ」

「何だよ？気になるじゃねーかよ、言えよ」

「……ふふ、当ててみたらいいじゃない？探偵さん」

「はあ。お前なあ」

「ふふふ」

終わり

（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4468o/>

まじっく快斗「伽藍童話劇場 白雪姫編」

2010年10月22日18時38分発行